

---

# セレクトゴッドラリー

東雲 アズマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セレクトゴッドラリー

### 【NZコード】

N6916D

### 【作者名】

東雲 アズマ

### 【あらすじ】

とある同人誌を手にした霧島宏人。それは次の神を決める大会の参加チケットだった！！興味本位で参加してしまった宏人は「なんとかなるさ」と神になるため奮闘する！！ 第2話にそれっぽいシーンが出てきたので「残酷描写有り」にしましたが全編に渡ってグロくは無いのでそこまで気にしないで下さい。

## プロローグ・選考会開幕（前書き）

一言だけ。このページを見てください。ありがとうございます！

## プロローグ・選考会開幕

「も、も、あつた！」

書店で同人誌を選んでいる若者が一人。名前を霧島宏人きりしまひるとという。いつもはその場で本を選んで買っているが今日はとある本を探していた。

「なあ宏人、モ工燃えはっぴいライフつつう同人誌の漫画があるんだけどさあ、知ってる？」

「なんだよそれ、はじめて聞くんだけど」

「それな、神の座を手に入れられる大会に参加できるチケットになつてるらしい」

「は？」

宏人は大げさに言つてみる。

「バカバカしいのもそうだが、神の座つてなあ。直ぐにそう思った。「まあそう言うなよ。昨日都市伝説を扱つてるサイトに久しぶりに行つてみたらそんな話題があつてよ…」

「で、今日俺にあつたら買つてこいと？」

「すまん！今日塾だからさ、ね？」

頭を深く下げる頬み込む。

「分かつた。みてくるよ」

「本当にあつたなんてな…」

宏人はほんの少しだけ驚いた。だがそこに一冊しかなかつたので直ぐにレジに持つて行くことにする。

「ありがとうございました」

レジ係りの店員が頭を下げる。店の奥からもう一人店員が出てきた。

「今の本、タイトル覚えてるか？」

「モエ燃え……とかいうやつでしたよ。それが？」

「おかしいなあ。そんな本入荷した覚えが無いんだよ」

「じいちゃん、ただいま」

「おかえり。今日は何買つてきた？」

「同人誌とファイギュア。ダブり出たんだけど、じいちゃんいる？」

「どれ見せてみな」

宏人のじいちゃん、名前を泰蔵たいぞうといつ。

泰蔵も学生の頃には宏人の様にファイギュアを買つていたりしていた。だがここ数年でまた萌えが流行りだし、老いた今でもアニメを見たりファイギュアを買つたりしているのだ。

「ほお、よく出来とる。ミルちゃんはやつぱり良いのね」

思わず泰蔵の顔に笑みがこぼれる。

「じいちゃんはミル子がお気に入りだもんね」

泰蔵とアニメを見た後、自室で買つてきた同人誌を机に広げた。  
「モエ燃えはつぴいライフだけ……胡散臭いこさんしゅといつか、露骨ろくといつか」

宏人は失笑しつつも手にとつて読んでみる。中身はなかなかで、悪くない。ストーリーにしても絵にしてもだ。

最後のページを開くと紙が一枚落ちた。紙には文字が書いてある  
ようだ。

「あれ？」

紙を拾つて読んでみる。

お知らせ

次代の神を決める選考会を開催いたします。皆様奮つてご参加下さ

い。 詳細は次の通りです。

## 参加条件

超能力や人間離れした技を使うことの出来ない普通の人間であることが条件です。

## 優勝賞品

神の力とその地位

## 参加方法

下記の空欄に参加者本人の署名をお願いします。 募集終了後に開会の宴にご招待いたします。

「な、なんだこりや… まじかよ」

書店で都市伝説級の本を見つけ、更に伝説は事実だった。 これ程驚いた事は宏人が生きてきた中でもそうは無い。 だが更なる驚愕が宏人に突きつけられる。

「は、はい？ なんですか、これ？」

思わず声を上げた宏人が見たのは紙の最後、署名を書く空欄の少し上。 そこには、募集終了までと刻まれたデジタル時計風のイラストが書いてあった。

「この時計… 動いてる？」

募集終了は今日の深夜十一時。 それまでに署名すれば参加できるのか？ というよりも、これって本当なのか？ 手の込んだ悪戯だよな、きっと。 でも署名ぐらいは、良いよな？ 何が起きるってわけでもないし。

宏人の手はペンを探す。 すかさず握る。

名前を書く。

ため息が一つ。

「まさか、ね」

宏人はなんだか解放された様な気分になる。

それでも期待はあった。都市伝説が現実として目の前に現れたのだ。一生に一度、あるかないかの経験なのだ。これを逃す手は無い。

「宏人お、『ご飯だぞー』

泰蔵の声が響く。宏人は現実に引き戻された。

「ねえ、じいちゃん」

「なんだ？」

泰蔵特製のカレーを頬張りながら、

「神様つてさ、この部屋の夜景よりもっとす』い景色が見られんのかな？」

宏人と泰蔵が住むのは高層マンションの一角。宏人の両親が用意したものだ。

父は職業柄海外出張が多く一年で宏人と会うのは数回程度。母もテレビ局に勤めていたが昨年アメリカ支局に異動となり、まず会えない。

「なんだ、そりや。新しいアニメのキャラッチ『ロビー』か？」

福神漬けを食べながらビールを一気に飲み干す。

「いや、そんなんじゃないけど」

「でもお前の言う事も嘘じゃないかもな。まあいい、じいちゃんアニメ見るぞ」

そう言って食器を片付ける。片付け終わるとDVDを選び始めた。

「何見るのさ？」

「今日は劇場版が良いの。どれ、じいちゃんが高校生だった頃の流行のを見るか」

泰蔵が選んだのはロボットアニメだった。ロボットアニメが衰退した今では滅多に眼にする機会がない。そんなロボットアニメは宏人にとって新鮮だ。

エンドロールを見終えた時には午前十一時を回りうつとしていた。

宏人は選考会の事を思い出す。

「そろそろ寝るね。おやすみ」

「あいよ。おやすみ」

宏人は真つ先に机に向かつた。宏人は選考会のお知らせの残り時間で確認する。後二分程に迫つていた。

「そろそろか……？」

突然同人誌が青白い光を放つ。光は少しづつ強さを増していく。最後には部屋を飲み込む勢いになつていて。

「大丈夫ですか？起きてください！！」

誰かが宏人の体を揺さぶる。宏人は目を開けた。宏人を起こしたのは執事らしき人物だった。

「二、ここは？」

深い眠りから覚めたような感覚のせいで完全には状況を把握できていない。

「選考会の、開会の宴の会場でございます」

宏人は周りを見渡した。お気に入りのキャラのポスター、ネットオークションでフルコンプした自慢のフィギュア、今までに買った漫画の数々、すべて無い。

宏人が気が付いたところは床一面に真紅のカーペットが敷き詰められ、壁には豪華な装飾、そして目を見張るような巨大なシャンデリア、そのぐらいしかない。どうやらどこかの豪邸のようだ。

「では会場にご案内いたします」

宏人も急いで付いて行く。

「ここでござります」

目の前には豪華な扉がある。宏人は思わず

「で、でかい……随分と豪華だな」

「左様でござります。この屋敷で一番に美しい装飾と執事一同自信

を持つて言えます」

執事は誇らしげに語る。

「では中にお入り下さい。ほかのお客様もお待ちです」

宏人はその巨大な扉を開ける。

そこには数え切れないほどの丸いテーブルが並び、先程までとは言えないが豪勢なシャンデリアが幾つも煌めいている。

「ようこそ。席に」案内いたします

「ど、どうも」

宏人の気分は高級フランス料理店に来た気分になっていた。去年家族三人でクリスマスに食事をした店に何処と無く雰囲気が似ている。

案内された席に座ると周りの椅子にも何かが座っていた。どれも人の形をした霧の様だ。

「霧？ガス？」

宏人が触れようとする。

「おいおい、俺は霧でもガスでもないよ。どうやら自分以外の参加者はこうやって誰だが分からぬようにしてるみたいだ」

「そ、そなんですか」

「主がご到着です。皆様お静かに！」

執事の一人が声を擧げる。といつても誰が誰だか分からぬこの場所が騒がしくなる事もなかつた。

宏人が先程入ってきた扉が開く。屋敷の主、神が登場した。

宏人の容姿の推測は完全にはずれた。白いスーツに立派な髪をたくわえた老人だ。人間と何ら変わりは無い。神は早足で部屋の一番奥に設置された椅子に向かって歩く。そしてゆっくりと椅子に座り込んだ後話し始めた。

「今日は参加者の皆に感謝する。これだけの人数が集まるとは」

そう言つて辺りを見回す。宏人も見回した。ざつと百人は居るだろうか。

「知つての通りだと思うが、私は皆が神と呼ぶ存在である。私もそ

ろそろ引退かと思つてね……おつと、話すと長くなる。ではルールを説明しようか」

会場が少しざわめく。

「今、君達が所持してゐるあらう同人誌モノはいだがこれは全部で本編が五巻、それと番外編が一巻ある。本編を五巻集めたならば神に相応しいかどうかの審査を受ける事ができる。これにいち早く合格したものに神の座を与える」

会場のざわめきは激しくなつた。

「簡単すぎるんじゃないのか？」

誰かが言つ。

「そんな事は無い。巻数が増える程冊数は少なくしてある。そして、ここからがこの選考会の醍醐味だ」

不敵な笑みを浮かべてまた喋りだす。

「この漫画、所持している者に特別な力を与えるのだ。それは巻数が増えるたびに強化される……つまりだ、戦つて奪い合えという事だよ」

「それでは、巻数が少ないものが不利だ！」

また誰かが不満をこぼす。

「大丈夫だ。街や、山間部にモンスターを配置しておく。それと戦い勝利すれば、少しずつ力が強化される。これなら安心であらう？」

ざわめきは止まない。誰かが質問する。

「手持ちの同人誌モノはいを失つたらどうなる？」

「怪物と化す」

空氣が一瞬凍つたが、直ぐに皆騒ぎ出した。もちろん宏人もだ。

「まあ良い。詳しいルールはルールブックを読みたまえ。さあ、大ラリ会の幕開けだ！！フツフツフ……ハツハツハツハアア！！！」

また青白い光が周りを包み込む。

「うわ！」

ドタン！

宏人が次に目を覚ましたのは自分の部屋だった。体勢からするとベットから落ちたようだ。

夢？こんなリアルなのは始めてかもしない。

「あ～あ」

夢じゃなかつたらなあ、どんなに面白いだろ。でもモンスターはごめんだ。

一人呟いているとベッドからノートの様なものが落ちてきた。どうせ同人誌だら、宏人は拾い上げて表紙を見た。

「選考会…ルールブック……」

思わず手が震える。

「はあ。しゃあねえ、頑張りますか」

何とかなるさ、と楽観的になる。カーテンを開けると太陽が昇ろうとしていた。

戦いの始まりを予兆する様に。

## プロローグ・選考会開幕（後書き）

ここまで読んでくれたあなた、更に感謝です。続きのアップは出来るだけ早くにしたいと思っています。次回も楽しみに待っていたければ嬉しいです。

## 第一話・初陣

開会の宴から一週間。宏人は何の成果も得る事もなく過ごしていた。

参加者に与えられる索敵能力を使って、街を歩いてみるも全く反応が無い。公園にでも行けばモンスターがいると思い、行つてみても何もない。

この日も普段と変わりない登校。そして授業。

「結局モ工燃えはっぴいライフは無かつたんだよな……」

「斎藤よ、まだ言つか?」

久しぶりに同人誌の事を耳にする。今、選考会に参加します！とも言えず、んなもん無い！と言つてしまつたのだ。宏人は黙つてこいつに渡しちまえば良かつたと少し後悔する。

「あ、そう言えば会長さんが持つてるとか持つてないとか……」

会長さん、確か……

「椎名崎琴音のことだよな？隣のクラスにいる、あの「まさか椎名崎さんとは……。宏人は中学生の頃を思い出した。三年間同じクラスなら記憶に残らない筈がない。

もしかすると友達と命を懸けて戦うなんて。宏人は予想していた事実ではあつたが、現実として遭遇すると悲しくなる。

「でも噂だろ？」

「らしいけどね。やべ、そろそろ授業じゃん！早く行こうぜ！」

二人は走つて教室に向かつた。その二人を影から見つめる少女が一人。

「やつと、見つけた」

久しぶりにモンスターを探しに近隣の公園に出向いてみる。モンスターの一匹でも見つけないと、この選考会が事実なのかどうかも

未だに疑わしい。

泰蔵には酒を酔いつぶれるまでどんどん飲ませた。これなら明日の朝まで起きないし、外に出掛けても気付かない。一人で暮らし始めてから分かつた、じいちゃんの習性だ。

武器はエアガン一丁と物置の片隅に眠っていた細い鉄パイプ。實際これが役に立つかは分からぬ。

「何かしら居ないかな？」

宏人は辺りを見回す。すると林の奥の方から物音が聞こえてきた。ガサガサ、と不吉な音が響く。思わず鉄パイプを握り締める。

「がはあ！－ああ、やっと抜け出せたあ」

モンスターの出現の代わりに背広の中年男性が出てきた。

宏人は目を細める。このおじさん、何やつてんだ？・酔つてる様にも見えない。

「いやはや、失礼。私、選考会スタッフの日向<sup>ラリー</sup>と申します。霧島さんですね？」

「あ、はいそうですけど……」

「いやあ良かつた！あなたに渡したい物があるんですよ」

そう言つて手に持つていたビニール袋を、宏人に手渡す。

「これは一体？」

「中には、モンスターの図鑑と時計が入っています。図鑑の方ははただの図鑑ですが、時計が凄いんです」

自信気に言葉を発する。

「この時計、横にボタンがあるでしょ？一見、時刻合わせのボタンの様ですが引っ張るとモンスターを引き寄せるんです！」

「へえ……。でも何故これを？」

腕時計の時刻を合わせながら聞いてみる。

「実は、開会の宴の後に配布漏れがありまして……、それで今日渡しに来たんです」

日向は申し訳なさそうに訳を話す。だが何か思い立つた様に表情が明るくなる。

「せっかくですから今使ってみてください！その格好からしてモンスター探しをしていらしたのでしょうか？」  
「これまた自信気になる。」

「じゃ、じゃあ使ってみます」

腕時計のボタンを引っ張る。空気が抜けるような音がした後、機械音が鳴った。

先程日向が出てきた林がまたざわめく。そして一気に林が揺れ動く。

次の瞬間には咆哮と共に影が現れた。

「うわ、リザードの高等種ですか……。すみません、私は手助けできないので見守らせていただきます」

「ええ！？」

そして宏人の目の前に人間ほどの大きさの一足歩行のトカゲが現れた。手には骨で作られた棍棒を握り締めている。

「グオオオオオ！」

ドシドシと足音を立てて宏人に襲い掛かってきた。

宏人も必死に避けようと後ろに下がろうとする。と、その時だった。宏人の姿を日で追いかかる。

着地の瞬間、思った。  
「あれ？」  
宏人は見事に宙返りを決めた。しかも宙で何回転もした。  
宏人は何故出来たのか戸惑った。だが宏人の体に刷り込まれていた様に何故かやり方のコツが分かる。

これなら勝てる！

宏人は調子に乗つてリザードの頭上を何度もジャンプする。リザードはその姿を日で追いかける。

「うりや！」

リザードの背後を鉄パイプで一撃。

「グオオ！」

「はあ、なるほど。霧島さんの最初の能力はこれですか」

日向は木の陰に隠れて感心する。その間も宏人の猛攻は止まらない。

「でりやあ！」

何度も跳躍してリザードを死角から攻撃する。

「グオ、グオオオ……」

リザードがぐつたりと倒れる。

「や、やつた！」

戦いが終わつた瞬間、宏人に疲労感が一気に押し寄せた。木の陰から日向が小走りで宏人に近づく。

「いやあ、見事です！あの動き、あの戦法、狩には慣れていらっしゃいますね？」

小さく拍手をして宏人を褒める。だが宏人は、

「いや、今日が初めての狩りですよ。自分でも何がなんだか……無我夢中つてやつです」

「え？ そうなんですか？」

と言う事は、能力の発見も初めて？ 初陣でここまで力を發揮するとは……。

「……そりやあ凄い！でも能力は体力と一緒に長時間の使用はできません。モンスターにしても参加者にしても、短時間で戦いを終わらせてくださいね」

「はあ、はあ、確かにかなり疲れますね。 そうします」

宏人は息を切らせる。近くのベンチに座り込みぐつたりとする。

日向は宏人のために近くの自動販売機でジュースを買つてきた。

「はい、どうぞ」

「あ、どうも」

冷たいコーラを宏人に手渡す。日向も自分にコーヒーを買つた。

宏人はコーラを一気に飲み干す。

「では、そろそろ私も戻らなくてはいけないので」

そう言つてゆっくりと歩き出しだが、すぐに立ち止まつて宏人の

方を向く。

「その力は同人誌モエはび」が自分の近くに無いと使えませんから。お忘れな

く

数メートル歩くと突然煙の様に消えてしまった。

それから数日。その後も能力が気に入つて毎晩公園に足を運ぶ。泰蔵を毎日酔い潰すわけにもいかないので深夜にこつそりと出掛ける。

モンスターは見かけなかつたが、人間離れした跳躍で公園の至る所を飛び回つていた。

ベンチから外灯へ。

外灯から水の枯れた噴水へ。

噴水からまたベンチへ。

どれも数メートルは距離が離れているし、高低さもある。普通の人間がするには到底不可能、だが能力によつて宏人には可能だ。

能力を使うために宏人はウエストポーチを身に着けている。決して小さくはない同人誌モエはびを持ち運ぶために考え出した、宏人の名案だ。少し疲れた宏人は外灯の下で伸びをする。風を切る感覚がまだ肌に残つていた。

「き、霧島君？」

とつさに後ろを振り返る。声を掛けってきたのは、

「椎名崎モエはびさん？」

まさか、と思う。

「こんばんわ。こんな所で何してるの？」

「ほら、ちょっと運動でもしようと思つてさ、あははは……」

「へえそなうなんだ……。私ね、じ、実は霧島君のこと、待つてたんだよ？」

その一言で確信が持てたような気がする。椎名崎さんも参加者だ。深夜にここに来るのが分かるはず無い。分かるのはストーカーか

参加者だ。

ストーカーの線は無い。椎名崎さんはそんな人じゃない。  
「索敵能力か……」

宏人はルールブックの内容を思い出す。

索敵能力は、同人誌が身の近くにある参加者を捜すことが出来る。

「き、霧島君……」

声が震える。今にも泣き出しそうだ。

よく見れば椎名崎さんは何か握っている。バットだ。

「本当はこんな事したくないんだけどね……『ごめん、ね』

目に薄つすらと涙を浮かべながらポケットから眼鏡を取り出して掛ける。

眼鏡？あ！

なんでもメガネを掛けると人が変わるとか変わらないとか……。学校での会話を思い出す。

「ふつふつふう、すまんねえお兄さん。か弱い乙女の学友をたた斬るのは、趣味じゃないんですけどねえ」

さっきまでの気弱そうな琴音は消え、代わりに活気に溢れた琴音が現れた。

誰だ？椎名崎さんじゃない、椎名崎さんの姿をした誰かだ！

「お前、椎名崎さんじゃないだろ？」

「君、面白いこと言うねえ。ボクは琴音じゃないけど琴音だよ。ボク気にいちゃつたよ！……でもね、琴音にも神にならなきやならない理由があるの。悪いけど同人誌、いただき！」

走つて宏人に接近し、すかさずバットを振り回す。

「うわ……」

バットが顔面の間近を通過する。

「しゃあねえ！」

跳躍で外灯の上に飛び乗る。

「ほえ～すんごい跳躍だねえ。君の能力はそれ？」

「まあな。そつちこそ、何なんだよ？」

宏人は目の前にいる「琴音」に小さな怒りを覚えた。椎名崎さんは嫌がつていた。それを無視するかの様に我が物顔で椎名崎さんの体を使ってやがる。

「ボク？ う～ん……ボク自身！」

「嘘だろ！？」

「嘘じや、ない！！」

そう言つと空き缶を宏人に向かつて投げた。女子高校生の腕から投げられるとは思えないスピードで宏人の額に直撃。

「プロ野球選手……かよ」

氣を失つた宏人は外灯から転落した。

「にひひ！ どうだい？ ボクの力、思い知つたかあ！ ！」

大の字になつてのびている宏人から返事は返つてこない。

「あれ？」

琴音はバットで宏人の頬を突いた。反応はない。

「「」、ご臨終？」

今度は宏人の口の近くに耳を近づける。しつかりと呼吸をしてい  
る。

「心配して損したあ」

大きく溜息をすると、氣を取り直して宏人のウエストポーチを物色し始めた。

「あつた！ へへえ、ではでは早速血印を……」

中身をめくつて幾たびに琴音の表情が怪しくなつた。その横で突つ伏していた宏人が目を覚ます。

「んあ～ああ、デコが痛い……。あ！ 僕の本！」

「ひつ！？」

突然大声を上げた宏人に琴音が驚く。宏人はすかさず同人誌に手を掛けようとする。

「てめえ、俺の返せ！」

「あ、うん。」めん、返すよ」

あまりに素直に返されたものだから宏人はむしろ驚く。

「あれ？お前もこれ、必要なんじやないの？」

「そんなこと言つても、ボクのと同じく第一巻なんだもん。君の奪つたつて意味ないもん」

琴音の頬が膨れる。

「ああ、そういうことか……。それよりも聞きたい事がある……」「まあ地べたに座つてのもなんだし、ベンチ、行こうか？」

二人はベンチに腰掛ける。仲の良い高校生に見えなくもないが、だが只今午前一時である。

「それで、質問は？」

「お前の存在自体が俺の質問対象」

待つてましたと言わんばかりに自信満々な表情に変わる。そして、バツと立ち上がり宏人の前に立つ。

「椎名崎琴音が手にした最初の能力そのものであり、椎名崎琴音でもあるのだあ！」

ポーズを決めて、ニコラと笑う。

「じゃあさつきの豪速空き缶投げは？」

「あれもひつくるめてボク。あ、そうそうボクのことはシーナって呼んでね！ダーリンでも良いよ」

「じゃ、前者で」

即答。ジュースの空き缶をゴミ箱に投げて答えた。シーナは反応の悪い宏人の背中にぴつたりくつ付いた。

「ひつづいて。今夜みたいな熱い夜、また一緒に過ごしたいですよ？」

「一度どじめんだ！」

「はつはつはあ！威勢が良いねえ～。ボクが見込んだ男なだけある。今日からうちの事務所に来なさい！」

宏人の肩をポンポンと叩いてにやける。

「なんか、会話だけで疲れてきた……」

「若いのに体力無いねえ……。いいジム紹介してあげるから、通いなさい！」

「じゃ、俺帰る」

「ああ、待つてよお」

ひたすら歩こうとする宏人の脚にしがみ付いて引きずられるシーナ、場所が場所なら漫才だらう。

「あ～眠たい……」

「この頃お前寝不足だよなあ。宏人、パソコンゲームのやりすぎだろ？」

「パソコンのウインドウ越しに彼女作ってるお前とは違うわー」

学生鞄で斎藤を思い切り殴る。

そこに後ろから声が会話に割りんできた。

「やあやあ、諸君おはようさん！」

シーナの眼鏡が朝日に反射する。

「シーナ……」

宏人の声のトーンが下がる。

「ヒロくうん、お、は、よお。あたしい、昨日みたいな事、またしたいなあ。いいでしょ？」

「あのなあ、誤解の多い発言は……控えろおーー！」

二人の会話を横で聞いていた斎藤が口を開く。

「宏人、お前その年で……うん。ギャルゲーは卒業か、二次元じゃ飽き足らず、うん、そうか。生徒会長と一人で、ホットナイト！……てか？」

斎藤の拳が小刻みに震える。明らかに怒りのこもった振るえだ。

「やべ、遅刻だ、遅刻！！」

宏人が全速力で走り出す。残された一人も追いかけるように走り出す。

「おらあ……霧島あ……待ちやがれ、この野郎あ……」「ダーリーン、待つてえ」

「総監、新たな情報です」

「どれどれ」

渡された紙をペラペラと捲る。

「この二人は？」

「それは先日の深夜に田撃された、中高生と見られる若者です」「何故私の処に持つてきたのかね？」

「異常な跳躍の田撃証言があるからです」

「うむ。それ以来、新勢力のテロリストの可能性がある。とりあえずマークしておくれよ」「たづねておくれよ」

「そんな学生すらテロとでも言つのですか？」

「君は世の中の広さを知らぬ。それだけだ。下がりたまえ」

男は椅子に座り込む。

「本当に世の中は広いものだよ。なあ？ 神よ」  
手の中には同人誌が、まるで宝玉でも扱うように握られていた。

## 第一話・初陣（後書き）

す」「更新遅れました。次はもつと早く更新できるように頑張りま  
す！！

## 第2話・明かされる真実（1）

「あ、霧島君」

放課後、宏人が学校から帰る途中で琴音に声をかけられた。

「何だよ、今度は何がしたいのかな？シーナ君」

「冗談半分で怒つたように問いかける。

「ち、違うよ。私、シーナじゃないよ……。ほら、眼鏡かけてないし」

「なんだ……」

宏人は安堵で大きく息を吐いた。

一方の琴音は大きく深呼吸をして小さく口を開いた。

「あ、あの、この間の夜は、本当にごめんなさい……」

あの時のように涙を潤ませながら小声で言つ。途中から肩も震えてきた。

そういうえば、と思い出す。よく考えてみればあの時は同人誌を狙つて襲われたんだつけな……。そう思い出してみるが、シーナの強烈な印象にそんな事思つてもみなかつた。

「そ、そんな泣かないで」

謝られている立場である宏人だが、なんだか申し訳ない気持ちになる。

「許してもらえる事じゃないつて分かってる……。でも、本当に、本当に、うう……」

道の真ん中で泣き崩れ始めた琴音に、戸惑う宏人。事情を知らない通行人達は、白い目を宏人に向ける。お前が泣かせたのか、と。戸惑う宏人の目に眼鏡が飛び込んできた。しつかりと琴音の手に握られている。

「椎名崎さん、眼鏡貸して！」

返事を聞く前に宏人は眼鏡を取つて、無我夢中で琴音にかけさせる。

途端に琴音は泣き止み、普通の顔に戻る。

「もう！！女の子泣かすなあ！！ろくでなし……」  
もう琴音ではなくシーナだ。

「てめえのせいだあ！！！」

二人の口論は数分続いた。

「ねえねえ、今日ぞ、久しぶりに行つてみない？」

シーナは空に向かつてチヨップをした。

「は？ なんだそれ、スイカ割りか？」

「これだから男っちゅう生き物はあ……」

「全く、ハンバーガーショップに着てまで口喧嘩する必要ないだろ

……。ハンバーガーが冷めるぞ」

そう言われてシーナは急いでハンバーガーに喰らい付く。口に含んだハンバーガーをよく噛んで飲み込むと、ジュースを飲んで一呼吸置いた。

「んで、結局あたしが言いたかったのは狩りよ、狩り！しゅ、りよ、りう！」

宏人の表情が怪しくなる。手に持ったハンバーガーをトレイにそつと乗せて、深呼吸する。

「やなこつた。俺は行かん」

「何で？ そんな事じや強くなれないよ？」

「お前先週のあれ、覚えて無いわけないだろ？」

「む……」

シーナの表情も不機嫌そうになつた。

「あ～眠い」

目を擦りながら宏人は深夜の住宅街を歩いていた。この日もモンスター狩りだ。

いつもの公園に向かう途中、琴音に出会つた。その後は公園まで

ずっと雑談を続けた。

「そういやさ、椎名崎さんの時には戦わないの？」

「私自身は何の変哲も無いただの人間だから。シーナに任せないと何にも出来ないんだ」

少し目が悲しそうになる。自分の無力を自嘲するように。

「そんな悲しんじゃダメだよ。だってシーナだって椎名崎さんの一部じゃん」

「そんな事無い」

小さな声だがはつきりと言い切った。

そんな姿を見た宏人はどうすることも出来なかつた。

「シーナはもう一人の誰かつて感じがする。私という体に入つているもう一つの魂みたいな感じ」

「ん……」

宏人はただ黙っている。そのことが良い事なのか悪い事なのか見当もつかないのでから当たり前だ。下手な言葉は掛けられない。ただ、重い空気を打破するために宏人は質問を変えた。

「あ、あのさ……。椎名崎さんは神様になれたらいどうする？」

「私はお母さんに生き返つてもうつ。ただそれだけ」

空気はより一層重くなつた。

「あ、その、何て言つか……」

言葉に迷う宏人を見かねてか、琴音は言葉を続ける。

「お母さんね、私が小学生の頃に死んじゃつたんだ。信号無視の車に轢かれてね」

遂に足が止まつた。それでもまだ話し続ける。

「その後ね、お父さんが博打に走つて借金抱えちゃつたり、会社をリストラされたりで色々あつたの……」

何を考えてか、ただひたすら喋り続ける琴音。それをひたすら見ているしかない宏人。空気は色付くかの様に濁んだ。

宏人は話を聞きながら考えた。俺みたいなのがこんな選考会に参加して良いんだろうか？椎名崎さんはかなりの覚悟があつて望んで

ラリー

いる。俺みたいな興味半分で参加したような奴に神の座なんておこがましい。

宏人の表情を窺つた琴音は、はつとした。腕時計で時間を確認する、宏人に言った。

「「めんなさい、こんな話して……。霧島君には関係無いのにね。……じゃあ私の出番はそろそろお終い。それじゃあ、おやすみなさい。頑張つて」

そう言つて急いで眼鏡を掛けた。自分の顔を仮面で隠す様に。いつもならシーナの顔は元気で満たされていたが、今日は違つた。

「「めんちゃい……なんか空気が……」

「いや、謝る事じゃないし。それよりも行こうか」

二人はその後何も言わなまま公園まで歩いた。

数分で公園に到着した二人は早速狩りの準備をした。

「宏人、呼び出し！！」

頷くと宏人は腕時計のツマミを引こうとした。その直後に物音がする。

「羽ばたきか？」

宏人が呟く。

次の瞬間、  
「蝙蝠！？」

とシーナが叫んだと同時に、ボールに羽が生えた様なモンスターが現れた。

「つつても田玉しかねえし……行くぞ！」

宏人はほぼ垂直に跳躍を、シーナはバットを握つて突つ込んだ。

「それっ！」

その体を覆いつくさんとする巨大な眼球がシーナのバットを目にする前に、シーナは思い切りバットをモンスターにブチ込んだ。

モンスターは叫ぶ事も無く宙をフラフラン舞う。だがそこに容赦無く宏人の蹴りが垂直に降りて来た。

宏人の攻撃が効いたのか、モンスターはそのまま地面に落ちて動かなくなつた。

シーナはバツトでそれを突いた。

「これで終わり?」

「なんじゃ、椎魚キヤラ敏な奴か？」  
戦闘開始からほんの数十秒、呆気に取られる間も無く終わった。

「RPGで最初に倒す敵みたいな？」

そういうながら一息ついているとモンスターの体に異変が現れた。

「歯が痛いの？ お口出ちは？」

振り返ったシーナの目に映つたのは、人の口が現れたモンスター

の体とそれに啞然とする宏人だつた。

口は突然絶叫した。それに呼

口は突然絶叫した。それに呼応するかのようにモンスターの体から明らかに人間の腕や足、目、骨、数え切れないパートが赤黒い血液と一緒にむき出した。その様はボールに人間の体のパートを無造作に付けたと、言えば容易い。

各部はそれに暴れていたが十秒も立たないうちにぐつたりと  
した。

シーナは立ち尽くす宏人にしがみ付く。宏人は脳の鼓動が高鳴るのを感じた。

死骸とも言えない様な残骸を凝視していた一人に三人目の声が割つて入つてきた。

「これを見るのは初めてかい？」

二人は同時に後ろを振り返る。そこには若い男が一人立っていた。  
夜中だと言うのにサングラスを掛けている。それ以上に目を惹くのが頭を覆う白髪だった。

「アンタ、誰？」

シーナが呟く。

「……ああ、参加者ではないよ。ただ少し関わりがあるだけさ」

サングラスをいじりながら男は優しい笑みを浮かべながら答える。

「そ、それよりもあれって何なんですか？」

宏人も口を開く。

「あれは亡骸<sup>ジャノク</sup>と呼ばれている、人間の成り果て。勿論、参加者の。手持ち、つまり今回では君達の持つ漫画といつか同人誌<sup>モエハビ</sup>の手持ちが全て失われたときに時々起<sup>ハ</sup>る。」

「でも、手持ちが無くなるとモンスターになるんじゃないの？これじゃあ惨殺死体<sup>ラリー</sup>みたいじゃん！！」

「君達は相当この選考会を知<sup>ハ</sup>っていない様だね……。では、一から君達に教えよ！」

## 第2話・明かされる真実（1）（後書き）

もつ「遅れなこよつて」とか言いません！！すいません！！

### 第3話・明かされる眞実（2）

遠い昔、神様は人間を作りました。男の人と女の人、一人ずつです。そしてその二人は楽園に置かれました。

すでがある日、蛇にそそのかされて神様に食べてはいけないと言われた樹の実を女人人が食べてしまします。その後に男の人にも勧めて食べさせます。それを知った神様はもう一本あつた樹の実を食べ、自分と同じにならないようにするため、楽園から二人を追放しました。

「簡単ではあるがこれが創世記、アダムとイブの話だ」

「これつて選考会と関係なんじゃ……」

三人は公園を離れ、街の繁華街の外れにあるバーにいた。とても小さいそのバーは席がたつたの五席。髭を蓄えたマスターが一人で切り盛りしてゐる古風な店だ。

「いや、そういう訳じゃない。この話には続がある」「  
「続き？」

シーナは振舞われた牛乳を片手に頭を傾げる。

「神は近頃自分にも寿命が近づいてきた事に気付く。そこで、後継者探しとしてこの選考会を不定期だが催す事にしたんだ。神しか扱う事の出来ないような力を扱えるだけの人間を探すために」

「それが俺らの能力つて事？」

「その通り。それにその力は元々人間に備わつてゐるものだ」「じゃあどうしていつでもどこでも使えないの？」

「神のみがなせる業、だからさ」

二人の質問を言葉に詰まることなくさつさと答える。

「たまにテレビに出てくる超能力者なんてのは、何かの影響で能力が解放されてしまった人達なんだよ」

「あ、もしかしてこの同人誌つて能力を解放するための道具？」

シーナがひらめいた様に聞く。男は微笑んで、

「その通り。君は察しが良いな」

ウィスキーを少し口に含んで話を続ける。

「正直な所、能力が使えても神にはなれない。本当に必要なのは知識の実と生命の実だ。同等の存在になるために必要な鍵となるのさ。知識の実は最初の人間、アダムとイブが食べたからこれは必要ないと思う。だが問題は生命の実だ。これを手にした人間はもう人間じゃない。神と呼ばれる存在になる。とはいえそれも手に入れることができたらの話だ」

「じゃあ、簡単には手に入らないんすか？ その生命の実って」

「確かに。この世には無いエデンの園を見つけられれば問題ないのだが……。だが、僕にもそれなりの考察がある」

「でたでた、君がお得意の力説」

マスターがくすくすと笑う。

「いいじゃないか。ええと、つまり生命の実は神にあつて人間には無いものだと思う。となればそれはただ一つ、完全な能力だ。それは簡単な身体能力や物質の物理法則を無視した出現や生成だけではなく、人間ひいては生命体の運命すら操る事ができる全知全能の力だよ」

「ちょ、ちょっと待つたあ！」

シーナが声を上げる。宏人はびっくりして肩を竦める。

「で、でも最初に、五冊そろえて審査に合格すれば神様になれるって言われた！」

「それは選考会のルール変更みたいなものじゃないのか？」

「あ、確かに」

宏人に言われて興奮が冷める。

「僕もそう思うな。今までのスタイルだと最後の一人になるまで戦わせていたからな。参加者のほとんどが怪物じやあ可愛そうだ。」

「怪物で思い出した。先程の亡骸の話をしよう」

「うわあ、正直言つとボクあれは思い出したくない……」

露骨に嫌な顔をして肩を落とす。

「亡骸<sup>シャンク</sup>とは怪物と化すはずの人間が怪物になりきれず生まれる、言わば不良品だ。君達が見たように人の体のパートが出てきたらう？それはそのせいだ。原因は幾つかあるが、突然の能力解放による身体への負荷や異形になりたくないという強い精神がほとんどだ」「はあ、じゃあモンスターになるって事実を受け止めさえすればんな風にはならないってか」

「そうだろうね」

宏人が独り言のように呟くとすかさず男は返答した。

「おや、もうこんな時間か」

男は腕時計を見た。すで深夜の一時を回っていた。

「こんなに遅くなつてはな……。よし君達を家まで送りう」

そういうと男に連れられるように一人も店から出る。店から少し歩いた所にある駐車場に一台の高級車が泊まっていた。

「僕の車だ。さあ乗つて」

二人は車に乗り込むと男に家の場所を教えた。

「そういえば、互いに名前を知らなかつたね。教えてくれるかい？」

「俺は霧島宏人です」

「はいはーい！…ボク、シーナつて言いますー！」

「シーナ？君は日本人じゃないのか？」

「いや、説明が面倒臭いんですけど、こいつが能力なんです」

男は運転に集中していたがそれを聞いて少し気が抜けた。

「それは驚いた。そういうタイプは始めて見たよ。で本名はちゃんとあるんだろう？」

「本名は椎名崎琴音ですー！」

「ふふ、可愛らしい名前だ。お、そろそろ霧島君の家だよ」

そう言つて宏人の住むマンションの入り口に車を止めた。シーナも車から降りた。

「琴音さんの家はまだ先だが……」

「いや大丈夫です。あ、まだあなたの名前を聞いてないです」

「そりだつた。僕は鞍馬。寛政元年生まれ。後、あのバーにも来てくれる」と嬉しい。昼間は喫茶店だから、放課後にでも寄つてくれ」「はあーい！」

シーナが元気に手を擧げる。まるで授業中の小学生のようだ。

「それじゃ。霧島君、こんな良い子を取り逃がすなよ？」

それだけ言って颯爽と去つていった。二人はそれぞれ違う反応をしていた。宏人は突つ立っていたが、シーナは宏人に擦り寄つた。

「ねえねえ、あんなこと言つてるよお？ やつぱりボクつて魅力的な

レディなんだよね？」

「んなことよりさあ、今鞍馬さんいつの生まれって言つた？」

「寛政元年……つてええ！？ あはは、きつと酔つてたんだよ、きつ

と」

「だよな！じや、また月曜日」

シーナは答えず宏人に近寄る。一人の距離は一気に縮まり、次の瞬間には宏人の左の頬にシーナの唇が触れていた。

「ちょ、何すんだよ！」

そういう宏人も抵抗もせずただ顔を真赤に染めていた。

「おやすみ」

宏人の耳元で囁くとシーナは走つていった。

「お、おい」

宏人は思い切り殴られたのかの様に頬を擦つた。だがシーナは突然止まつて振り返り、また宏人に近寄つた。

「このぐらいの事で本気になつてちや、ボクの彼氏になれないね！ はい、不合格！！」

宏人の額を思い切り弾くと今度こそ走つていった。と言つよりも逃げていつた。

「いてえーちくしょおーー月曜日、覚えてろよーー！」

再び鞍馬はバーに戻つた。年季の入つた重たいドアを開け、お気

に入りの真ん中の椅子に腰掛ける。

マスターは注文されるでもなくウイスキーを出し、店のドアに掛かっていた‘OPEN’と書かれた板をひっくり返し、‘CLOSE’にした。

「あの二人なかなか面白いよ」

「どこが？」

鞍馬の椅子の隣に腰掛けて問いただす。

「女の子の方、椎名崎琴音つていう子なんだけど、あの子自身が能力らしい。能力を解放できるのがさつきの人格らしくてね」

「そりゃあ驚きだな。んでもう一人の人格の方は？」

「残念だけ見ていないな」

「んで、男の子の方は？」

煙草を吸つて一呼吸置いてから聞いた。

「ああ、これはまあ僕の勝手な予測だがきっと泰造氏の息子か孫だ

うひ

「本当か？」

「たぶん、だけど。霧島と聞いて。それに若い頃の彼にそっくりだ」

「この老いぼれにはそつは見えんかつたがな」

「女の子に疎い所がね」

二人は顔を見合させて笑う。だがマスターが思い立つたように話題を振る。

「そういえば、この頃警察が少しばかりだが、このラリーに関係しどるんだ」

「どういう意味だ？」

ウイスキーのグラスを置いて鞍馬を尋ねる。

「どうも参加者をテロの新勢力とか言つて捜索してるそうだ」

「まさか？」

「つむ。奴らが日本の警察に介入しとる可能性がある」

「だとしたら、奴らも考えたな。日本なら警察さえ動かせれば捜査の名目でいくらでも参加者を捜せる……。あの子達も危ないじゃな

いか！」

「我々で保護した方が良いと思うが……」

「そうだね。明日何処かで彼等と会う事にするよ」

そう言ってまたバーを出て行った。

### 第3話・明かされる真実（2）（後書き）

なんか今回は会話ばっかりでした（汗）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6916d/>

---

セレクトゴッドラリー

2010年10月11日11時25分発行